

甘美で危うい魔王暗殺計画

女体化 聖騎士セレス



木森山水道
イラスト 河野雅夫

試し読み版

プロローグ

第一章 不良聖騎士の魔界入り

第二章 魔物姦に目覚めさせる澁刺淫魔の逆レイプ筆下ろし

第三章 女体の甘美な魅力を教える淫魔のレズ泡姫レッスン

第四章 心の牝化をうながす因縁のシヨタオークとの尻穴姦

第五章 正気を狂わせる紳士魔王の悦楽逆ソープ

最終章 暗殺かハーレム入りか 女体化聖騎士の選択

エピローグ

004

007

018

057

112

186

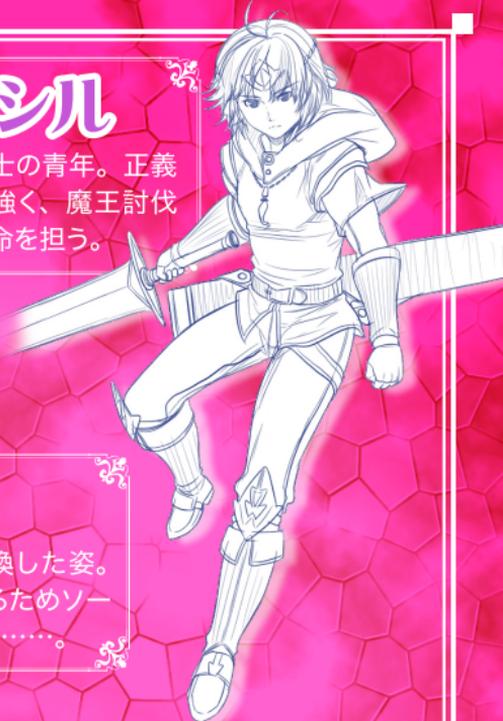
247

299



セシル

聖騎士の青年。正義感が強く、魔王討伐の使命を担う。



セレス

セシルが性転換した姿。魔王を暗殺するためソープ嬢を演じるが……。



アイリーン

妖艶な淫魔。魔王軍に襲われていたところをセシルに助けられる。

ショート

魔王軍の軍武大臣であるオーク。小柄ながら戦闘能力は高い。

オサン

数多の魔物を率いる魔王。魔界一の好色男ともいわれている。

女体化
聖騎士セレス

CHARACTERS

プロローグ

彼が目覚めたのは、中央の天蓋付きのベッドであった。

その部屋は、王侯貴族の寝室のように広い。

内部をくまなく照らすのは、太陽みたいに目映いシャンデリア。

降り注ぐ光は、くるぶしまで埋まる赤絨毯と、三方を囲む白い壁に温かみを与えていたが、奥を仕切る全面ガラスと、その向こうの大きめの浴室の全容も、クッキリと浮き上がらせている。

こんな最高級の一室で、若い男女が向き合っていた。

「いいこと、聖騎士セシルくん。このあたし、淫魔アイリーンが言っただけ」
口を開いたのは女のほう。

ベッドの側で腰に手を当て、黒く長い爪を鼻先に突きつける。

「あなたはすつごく強いけど、今のままじゃ魔王様に勝てない」
女は人間ではない。

近い容姿ではあるものの、頭に角を、背中からコウモリの羽を、お尻には先っぽがハ

ト型の黒く細長い尻尾を生やしている。

魔物という人間の天敵が存在するが、彼女はその一種——淫魔種族なのだ。

特徴を言えば、性愛の権化そのもの。生まれついでのにっぴちである。

「くっ……気にしてゐることを」

男が苦々しく認める。

こちらは人間だった。

もつとも、ベッドから上体を起こしている彼は、目元と口元を除いて包帯に覆われている。ヒトと言うよりも、魔物のミイラ男種族の外見だった。

「それでも諦めない。どんな手を使ってでも倒してやるというのなら、方法は一つね」
突きつけた指先を引っ込めて腰に置くなり、今度は自分の鼻先をつけてきた。

自分の顔の体温を浴びせつつ、理想と現実の違いからかすかに淀んだ瞳を見つめながら、
明言する。

「男をやめて女になりなさい」

「……へ？」

「魔王様の愛人になるのよ」

「……え？」

「あの方は魔界一の好色男。夜の帝王どころか昼だってパコっちやう筋金入りのド変態。ズコバコヤられながら、その隙を突くわけ。簡単でしょ？」

「……ええ!？」

「美人の床上手に目がないから、まずはそこを目指すわよ。心配いらないわ。あたしがちやんとプロデュースしてあげる。美しすぎる一流のソープ嬢にね」

「ちよっと待て！」

自信満々で胸を張る淫魔に、聖騎士が叫んだ。

「男のおれが女になるとか、ソープ嬢とかいう……話の流れからすると娼婦の一種みたいだが、それにならせるとか……しかも、愛人として抱かれてるとき？ に暗殺すればいい？ 本気で言ってるのかよ、いろいろな意味で」

聞いたことのない言葉を話の筋から推測しながら訊ねると、こう言い切られた。

「もちろん」

「うわ、本気の時つきで領きやがった！」

彼は思わず頭を抱える。

脳裏をよぎるのは、こんなことになった経緯だった。

第一章 不良聖騎士の魔界入り

薄紫色の魔界の空の下。

人間が繁栄する人間界と隣り合う、魔物という異形が支配する世界の辺境。

決して気温は低くないのだが、草木がまばらで寒々とした景色の荒野で、一人の女が襲われていた。

「ち、近寄らないで！」

怯えた声で拒絶するのは、生白い肌の淫魔。

性の悦びを本能とする女性型の魔物は、人間で言えば十代後半に見える。

顎のラインで揃う青みがかった黒髪。恐れながらも相手を気丈に睨み付ける切れ長の吊り目。ふっくらした唇はグロス抜きでも桃色をしている。

端的に言えばかなりの美形だが、カラダつきも抜群だった。

胸も尻もたわわに実り、括れは見事にほっそりしている。

鋭い爪を伸ばした赤黒い手。

そんなデザインのカップを乳房の先端につけると共に、Tバックの前布としている。

透き通るように白い全裸には他に、太ももの半分までくるニーハイソックスと、二の腕の半ばまで達するグローブを着けていた。どちらも薄い上に網目が細かい代物なので、両手両足は艶めかしい光沢を放っている。

要するに、グラマーな美女が男を挑発している姿であつた。

履いている赤いハイヒールが、妖艶な若い色気に拍車をかけている。

背中のコウモリの羽、先端がハート型の黒く細長い尻尾、頭からは牡牛の角。

人間が見れば恐れるであろうそんな魔物のシンボルすらも、魅力を高めるアクセサリーにしか見えない。

当たり前といえれば当たり前だが。

ひとけ 人気のないこんな場所で絡むのは、牡の魔物どもだった。

合わせて四体のオーク種族が、淫魔の四方を囲んでいる。

豚の顔に太った人間の身体、それに腰巻き一つの緑色の異形どもは、手にする棍棒で自身を軽く叩きながら、口々に言い放つ。

「へへへ、観念するんだな」

「貴様ら民間の魔物が平和に暮らしていられるのは、俺たち魔王軍のお陰だぞ」

「しかも我らはその名も高き、辺境警備隊四天王！」

「奉仕させてやるんだから、涙を流して感謝しやがれエ」

既に相当興奮しているらしい。

棒状に盛り上がる腰巻きを隠しもせず、四体はじりじり距離を詰める。

「冗談じゃないわよ！」

淫魔がキッと睨み付ける。

「軍人なのを笠に着て、たまたま通りかかっただけのあたしをオモチャにしようだなんて、恥を知りなさい！ あんたたちみたいに、見かけも心も腐ったブサキモ野郎どもなんかに、絶対にやられるもんですか！」

コウモリの羽を羽ばたかせ、パッと上空に飛びあがる。

「逃がすかよ！」

一体のオークが勢いよく棍棒を振るう。

ブンッ！

陰気な空気を押しつけて、上空に向かって衝撃波が走る。

「きゃあつ！」

頭上に逃れた淫魔に直撃。彼女は錐もみしながら、元いた地点へ落ちていく。なんとかバランスを取って四つん這いで着地するが、ダメージは浅くなかった。

「さいつてー……民間人に暴力を振るうなんて信じられない……うう」

よろよると立ち上がるが、それで精一杯。

攻撃を受けたお腹の辺りが、硬い棒で思い切りぶん殴られたみたい痛む。

力が抜けて膝が笑い、おまけに吐き気がこみ上げてくる。もつともこちらは、汚らしい魔物どもへの嫌悪も原因だったが、なににしても逃げられるような体調ではない。

「たくつ、手間をかけさせやがって」

「念のため、足を折ったり羽をいんだりしてから犯そうぜ」

「遊んだら燃やすなり、凍らせて粉々にするなりして、証拠隠滅するのを忘れるなよ」

「他の奴に知れたら面倒だもんな。ないとは思うが、ショート様に知られたら特ヤバだ」

そんなことを言い合いながら、今にも倒れそうな淫魔に近づいていく。

「こんな奴らに犯された挙げ句に殺されるなんて絶対にイヤ……誰か……誰か助けてエ！」

お腹のダメージであまり大声ではなかったが、懸命に助けを呼ぶ。

「ブヒヒヒ！ 無駄だ。こんなところにいるとすれば、それは警備の俺たちくらい」

余裕たっぷりと言われるが、淫魔は諦めずにさらに叫ぶ。

「もしもこいつら並みのブサイクでも、我慢してたっぷりサービスするわよ！」

「おいこら、そいつはどういう意味だ！」

「どういう意味もないだろ。わからないなんて、頭は顔以上に悪いようだ」

「!?」

勢いよく振り返る四体の魔物。

最後の言葉は、淫魔のものでも仲間の誰のものでもなかったのだ。

「まさか……貴様は人間か！」

「目は普通らしいな」

距離にして十歩ほど。

魔物どもから離れたところに、一人の若者が佇んでいた。

年の頃は二十歳前後。

短髪のなかなかのハンサムだが、剣呑につり上がった目が台無しにしていた。

濃紺のズボンと上着で背の高い細身を包み、頑丈そうな革のブーツと手袋をしている。

旅人のように簡素な出で立ちだが、腰には長く幅の広い剣を帯びていた。

特に印象的なのは額で輝く額当てだ。

半円の軌跡を描く金色のフレアムの中央に、拳大の青い宝石が埋まっている。

「おれは魔物も嫌いだが、弱い者いじめが大嫌いだな。精神衛生のためにぶつ殺されたく

なかつたら、とつとどつつかへ行きやがれ」

オークどもに負けない粗野な口調で言い放つ。

「人間なんぞが生意気なつ」

ゆらりと一体が進み出る。衝撃波で淫魔を撃墜した魔物だ。

「大方、雑魚オークとでも思ってるんだろうが、そいつは大間違いと言っておく」

「ほう」

「俺たちは精鋭中の精鋭、辺境警備隊四天王！ 人間界でうろついている木っ端はもとより、強者ひしめくこの魔界でもエリートなんだぞ！」

「ふうん」

「……この人間、舐めた態度をとりやがる」

「人間には豚の鳴き声を真剣に聞く習慣なんてないからな」

「減らず口を！ どうせ貴様は死あるのみ。エリートオーク様のお楽しみを邪魔した大罪、あの世で後悔するがいい！」

相手が動かないのをいいことに、棍棒の間合いまで来て対峙したオークは、おもむろに得物を振りかぶる。だが。

ドスッ！

先に攻撃したのは若者だった。

棍棒が振り下ろされるより先に、乾いた地面に足跡がつくほど強く素早く踏み込み、魔物の太鼓腹に拳を埋めた。

「うごおおお！」

「おっと。あんまり殴り心地のよさそうな腹だったから、思わず手が出ちまった」

軽口を叩きながら、腕を振り抜く。

魔物の巨体が弾かれたように吹き飛んだ。ほどなく地面とぶつかり転がって、仲間のところまでやっと止まる。

「おい！」

一体が声をかけるが返事はない。白目を剥いてだらりと舌をはみ出させている。

「この野郎、消し炭にしてやる！」

別の一体が棍棒を構えて呪文を唱える。短い詠唱が終わると即座に魔法が発動。ただ長く長いだけだった棍棒の上半分から真つ赤な炎が噴き出し、その状態が持続する。

「こいつに触れたら、瞬く間に火が移る。消し炭になるまで決して消えない！」

すると、他の一体がその横で吼えた。

「いいや、凍らせてバラバラに砕く！」

同じように魔法を使う。こちらは氷が噴き出した。凍える冷気を放出しながら固まる。

「こいつに触れたら、瞬く間に凍り付いていく。氷塊はどんな炎でも消せやしない！」

「ほんとかよ」

「なっ!？」

驚愕して振り向く二体。

軽い口調で言ったのは、若者だった。

触れそうなくらいに接近してる魔物どもの肩から顔を出している。

「いつ背後に回った！」

「いつもない。お前ら遅いんだよ」

若者は両手を伸ばした。魔物どもが棍棒を持つほうの手首を掴み、別の魔物の顔へ近づける。炎の棍棒が氷の棍棒を持つ魔物の鼻先へ、他方、氷の棍棒が炎の棍棒の魔物の鼻の頭へ、どンドン距離を詰めていく。

「ひいいい！ つ、冷たいっ……こ、凍ってバラバラになるううう！」

「あちっ、ああ、あちいッ！ 燃えちまうう……消し炭になるのはイヤだあ！」

勇ましかった二体がすぐに青ざめ、ほどなくわめき始めた。

じりじり近づいてくる棍棒から逃れようと、泣きながら首を伸ばしている。

「おいお前ら！」

淫魔の側で無事である最後のオークが呼びかける。

「魔法はしばらく解けんだろうが、人間の手を振りほどけば済むだろうがよ！」
当たり前の指摘に、窮地の二体は涙声で怒鳴り返す。

「できねんだよオ！ こいつ、俺たちよりも馬鹿力でビクとも……く、くるなああ！」

「おまけにしれつと足を踏んで、動けなくしてやがる……イヤだア、殺さないで〜！」
力一杯、絶体絶命ぶりを説明する魔物どもに、若者が他人事のように呟く。

「その様子じゃ、ほんとに燃えたり凍ったりするようだな。ほれ燃えろ。そら凍れ」
「死にたくない〜〜〜〜〜！」

棍棒の炎や氷が触れかけた瞬間、二体は白目を剥いた。泡を吹いて力なく崩れ落ちる。
若者が哄笑。

「ぶハハハ！ エリートオーク様は、みっともなさもエリート級だな！」
炎と氷の棍棒を取り上げて適当に放り捨てる。

終わると足を振りかぶった。向けられている尻に向かって順番に振り下ろし、まだ無事な仲間のほうへ蹴り飛ばす。

「貴様はいつたいなんなんだ……」

土埃を上げて石ころみたいに転がってきた仲間を起こしもせず、最後のオーク。化け物に向ける目で若者を見ている。

「おれはセシルⅡトランセル。お前ら魔物の天敵、聖騎士だ」

「なんだと！」

驚愕する魔物。

「魔王様の宿敵である勇者……それをモデルに人間が人工的に生み出す超人……勇者と同等の力をもつ改造人間が、確か聖騎士という存在のはず……」

「正解。してる額当てが聖騎士のシンボルであり、身分証明書代わりというのも覚えとけ」
「くっ……聖騎士か……それで四天王ともあろう者が、次々とこうもたやすく……」

「そうだな」

「もしかしたら嘘かもしれないが、三人を一蹴したのは変わりない……」

「お、来るか？ やられた連中は実は格下、我には決して敵わないとかいうのか？」

「フン……そのような言葉など無意味。なぜなら、すべきことは一つだからな！」
くわつと目を見開くオーク。

行動は素早かった。

あつという間に仲間を肩に担ぎ上げると、脱兎の如く駆けだす。

「覚えてろ〜！」
荒野の地平線に向かって小さくなる中、そんな捨て台詞を響かせた。

第二章 魔物姦に目覚めさせる澆刺淫魔の逆レイプ筆下ろし

「さて、おれも行くか」

若者は魔物が去った方向へつま先を向ける。

「あつちに拠点がありそうだ。小者どものお陰で、探す手間が省けたぜ」
ひとりごちて歩きだす。

そのときだった。

「ありがとう、聖騎士のセシルくん！」

ガバッ！

横から猛烈な勢いで滑空してきた淫魔が、勢いよく抱きついた。

「おわ！」

ドスン！

押し倒されて尻餅をつく青年。

「くう……殺気がなかったから反応が遅れちゃった……」

見ると淫魔は、両手を回してまだ胸元にひつついている。

「てめえ、なにしやがる！」

「なになって、お礼よ」

「馬鹿を見る目で見てくるな！　そういう意味で言ったんじゃねえよ、この馬鹿淫魔！」

「ひどい！　女の子に向かって馬鹿なんて言う？　セシルくんだから許すけど」

「くん付けで呼ぶなっ！　そもそもさっさと離れて消え失せろ！」

「えー」

「なんで不満げなんだよっ。おれはお前ら魔物の敵だぞ？　淫魔の細い首なんぞ、片手で

だって絞め殺せる聖騎士だ」

「知ってる。でも、あたしは殺されない。なぜなら敵意がないからよ」

「なんだと？」

「無抵抗な魔物を殺すなんて、聖騎士にとっては不名誉でしかないわ。そうでしょ？」

「ちくしょう、痛いところを突いてきやがる……しかし、聖騎士に詳しいなお前」

「えへへ」

「うわ、腹立つ笑顔！　安全地帯から舌出してるガキ並みにムカつくッ」

「そう怒らないでよ。助けてくれたお礼に、イイことをしてあげるんだから」

淫魔の口調が、妙に甘く粘っこくなってきた。

「助けたわけじゃねえ。結果的にそうなったただけだ。だからとつとといなくなれ」

「あら、童貞のくせに言うじゃない。美人がイイこととしてあげるって言ってるのに」

「なんだと……？」

「美人がイイこととしてあげるの。助けてもらったお礼にね」

「そこじゃねえよ！　なんでおれが童貞だってわかるんだ！」

「知らないの？　淫魔はねえ、匂いでわかるの。スンスン……最後にオナニーしたのは、十三日と六時間前ね？」

「……まさかのドンピシャかよ……そんなことまでわかるなんて……！」

「今まで何回したかもわかるわ。えーと……」

「やめろ！　そんなことを他人の口から聞きたくねえよ！」

半泣きで頼むと、淫魔はにつこり微笑んだ。

「じゃあ、童貞聖騎士くんをイジメるのはこのくらいにして、本題にイキましようか
目を輝かせながら胸板にバストを押しつけてくる。

ムニユウ。

「う、うわッ……なにしてんだよ！」

「だーかーらー、お礼だって。どう、あたしのオッパイは」

「ど、どうって……」

思わずバストに目が行く。

男の手からもはみ出す豊胸は、縁を盛り上げながら平たく潰れている。

先っぽに申し訳程度に張りついている布製のカップが埋もれているので、まるで裸の乳房を押しつけられているようだった。

温かくて、心地よい反発力で胸板を押しってくる感覚が、そんな気分を加速させる。

(まずい……妙な気分になってきた)

ゴクリと喉を鳴らす若者。

二週間近くも禁欲してきた健康な身体は、女体の実感に反応し始めていた。

胸の奥がざわめいて、妖しく痺れている。

股間が熱く硬くなっていくのがハッキリわかった。

有り体あていに言えば、自分は今、淫魔相手に発情しかけている。

(冗談じゃないぞ。相手は魔物、人間の敵だ。そーいう対象じゃない……)

自分に言い聞かせ、湧いてくる劣情を抑えようとする。

しかし。

(くそっ……こいつ、淫魔だけあってすげえ美人で、おまけにいいカラダすぎる……オ

ッパイだけじゃない……のしかかつてきてるから、身体のあちこちに柔肌が触れて……
そっちも纏めて気持ちいいぞっ)

淫魔のカラダの感触が、じわじわ正気を蝕んで、肉体の欲望を呼び覚ます。

(うおおっ……チンポが疼いてきやがった……勃起がとまらねえ……!)

分身が刻一刻と意識から離れていく。

まるで淫魔を性交相手と認め、早く中に入りたいと言わんばかりに太く長くなっていた。
(こんなところ見られたら、コイツはきつとさらに調子づく……そうならない前に追い払わないとっ)

削られていく正気を総動員して、まなじりをつり上げる。

「お、おい淫魔！ その辺にしとけよ！ 敵意がないから殺しはしないが、こんなことされて黙ってねえぞ！」

すごんで睨み付ける。

しかし、淫魔はニタリと笑った。乳房を押しつけながら、横にずれていく。

「そんなこと、とっくに知ってるわ」

「なに？」

「セシルくんのココ。さつきからあたしのお腹を突き上げて、すぐく主張してた」

ずれていった方向と反対側の手を伸ばす。

胸板にそっと触れる。若者は、何事かと視線を向けた。すると、細い指の白い手は、ゆつくりと動いていく。胸板から鳩尾へ、さらに腹部へ。愛撫するような手つきで移動する。その手の指先を、彼の目は自然と追う。

「あッ！」

ほどなく気づき、短く叫ぶ。

「ウフ、今も主張しまくりだわ」

淫魔の手が止まった。

その地点は股間。

ズボンを盛大に盛り上げて、テントを張っている部分である。

「あん、服越しでも、すごく熱く硬くなってるのが伝わってくるわあ」

五本の手指を妖しく蠢かし、まさぐってくる。

「うっ……そ、そういう意味で言ったんじゃ……くうッ……！」

性愛の権化のタッチはいやらしかった。

指先でくすぐる愛撫ののだが、何度も甘ったるい快感電気を味わわせる。

料理で言えば、前菜というところか。メインディッシュにあたる射精の快楽にはほど遠

いが、それを求めたくなる。ひたすら性感を煽り、セックスに駆り立てる、娼婦じみた手管だった。

(そりやそうだ……こいつは淫魔……生まれながらのセックスのプロ……童貞という素人のおれじゃ、ペースにはめられたら抜け出せねえ)

そんな分析をしている間も、ペニスはどうもその気になっている。

絶妙な前戯に心を溶かされ、かなり本気で淫魔を抱きたくなってきたのに危機感を覚えて、若者は怒鳴った。

「も、もうやめろって！ 本気で怒るぞッ！」

だが、淫魔は動じなかった。機嫌よさそうに言ってくる。

「勃起チンポって、怒張とも言うわよね」

「うるせえよ！ いつまでも思い通りになると思ったら、大間違いだぞ！」

「まあ、そうカッコカしいですよ。セシルくんってば、焦れてるのね」

「なんだと？」

「興奮させられるだけで、いつまで経っても本命にありつけないもんだから」

「誰がそんなこと言った！」

「ごめんね。可愛く反応してくれるから、ついチンポいじりに夢中になっちゃって」



「あくまで無視かッ！」

「すぐにやらせてあげるから、機嫌直して」

「なんだって……うわ！」

淫魔は手のひら全体でテントのてっぺんを強めに撫でた。

強い快感が走り、若者の下半身が脱力する。その隙に手早く下着とズボンを脱がし、横に放り投げた。実に手慣れた手つきだ。

「うん。若い未経験者らしく初々しい色をしていて、サイズはフツーくらいだけど、硬く伸び上がってる様子には勢いがあるわ。一人前の大人チンポじゃないの。童貞だけど」

「おいッ！ お前いいかげ………」

露出した下半身から完全に勃起した分身がそそり立っているのも忘れて文句を言おうとしたが、尻切れトンボになってしまった。

すぐに腰を跨いで仁王立ちした淫魔の股間に、釘付けになってしまふ。

彼女はなんと、下着のサイドの蝶結びに指を伸ばして、すっかり解いてしまっていた。

「な……なな……なにやってるんだよ……！」

申し訳程度の面積しかない、魔物の手のようなデザインの水がハラリとめくれて、片方の大陰唇がちよっぴり見えているのにドギマギしながら言うが、淫魔は答えなかった。

第三章 女体の甘美な魅力を教える淫魔のレズ泡姫レッスン

「ところで、いくつか気になることがあるんだが」

「なあに？」

女が変わってソープ嬢の修行を積み、魔王の愛人になれば勝てる。

魔王討伐命の聖騎士が、知り合った淫魔にそう提案されたあと。

しばらく沈黙考していた彼が切り出した。

「お前、アイリオンって名前だったのか」

「あー。そういえば、自己紹介もしないでパコッてたんだあたしたち」

「パコるって……オマンコすると同じでセックスって意味なんだろうが、またえらく卑猥な語感だな」

「なに他人事みたいに言ってるの。あなたにも、こーい言葉覚えてもらおうわよ」
「げっ」

「魔王様に限らず、男って好きなものなのよ。顔や声が綺麗な女が言うほど喜ぶわね」

「そういうもんかもしれないな」

「ほんとバカよねー。でも、そういうところも可愛いんだけど」

「可愛いと言われても、穴があったら入り入りたくなくなるサガだよなあ」

自分も嫌いでない若者が溜息を吐く。

「で、話は変わるが、ここはどこなんだ？ ……そもそもなんでおれは生きてる」

「ここは魔界の首都。繁華街に構える高級娼館よ。名前は【エクスタシーガーデン】」

「いかにもな名前だな。しかし、娼館だったとは……ならここは、売春婦が客を取ってるホテルみたいなもんか」

「その通りだけど、そんじよそこらの娼館じゃないわ。高級という言葉は伊達じゃないの。店の造りや並ぶ家具、脇を固める従業員や花形の売春婦の質やサービスも、なにもかもが最高で、魔界屈指の超一流店なのよ！」

両手を大きく振って力説してくる。

「確かに、そんな感じだな。少なくともこの部屋は、人間界の王侯貴族の寝室と言っても、五つ星ホテルと言っても通じる高級さだ。噂に聞いただけで入ったことはねーけど」

彼はうんうん頷いてから、再度訊ねた。

「んで、おれが生きてる理由は？」

「あたしがショート様に命乞いしたから」

「そんなところか……でも、よく見逃したなアイツ。おれもだが、殺す気で戦ってたぞ」
「二日二晩の死闘だったわねえ。途中で目を覚ましたキモブタ野郎どもは真っ青になって逃げ出して、あいつらから話を聞いたのか援軍も見物も来なかったから、あたし以外は誰も見てないけど」

「そういや、なんで応援が来なかったんだ？ あのガキジジイ、敵ながらそう悪い奴じゃなさそうだから、人望ゼロで見捨てられたなんてことはなさそうだが」

「あの方、可愛い顔してるけど、あれでかなりの戦闘狂なのよ」

「ん？」

「一対一を邪魔したら貴様から殺すっていう、激しいタイプ。魔界では有名な性格よ」

淫魔は人指し指を立てて説明する。

「魔王様に負けないくらいに色好みで、奥さんがたくさんいるのも有名よ。これマメね」

「知れ渡ってることもマメ知って言えるもんだっけ？ ……けど、どう見ても年下のガキみたいな外見だからか、なんかムカつくな。おれなんか、つい最近童貞を捨てたばっかなのに」

首をひねりながら包帯の顔をしかめる聖騎士。

「なに言ってるの。そういう性格のお方だから話が通じて、命拾いした面もあるのよ？」

「どういう意味だ？」

「絶体絶命になったとき、たとえここで負けてもあなたなら、打倒魔王様の目標のためなら女にだってなるだろうと思ったから、割って入って言ったのよ。『見逃してくださいさるなら、この聖騎士を一流のソープ嬢に育て上げ、魔王様の愛人にしてみせます。ですがその直前には、あなた様に具合を見ていただきます』って」

「おい!？」

「ショート様はおっしゃったわ。『うん、いいよ。すごく面白そうだから』って」

「マジかよ!!？」

「そのあと、顔が利いて修行に都合がいいココに運び込んで、治療したってわけ」

「いろいろな意味ですげえ話だなおい」

今度は彼女が、相変わらずの気楽な様子で訊ねてくる。

「で、どうする？ 女になってソープ嬢の修行を受けて愛人を目指す？」

「ああ。そうさせてもらおう……」

「へえ」

「ガキジジイに負けて、しかもふざけた理由で見逃されるくらいに実力差のあるおれが、あいつを倒した魔王に勝てるもんか」

「そりゃそうよね」

「鍛練を積みれば大丈夫という保障はないし、ここは敵地。修練に打ち込める環境じゃない。人間界に引き返すのは論外だ。逃げ帰った聖騎士に、居場所なんざねえ」

「そんなところね」

「なら、僅かでもある勝機に賭けるのが男ってもんだろ」

「うんうん、聖騎士らしい言葉だわ。追い詰められた末の決断だけど」

「それは言うなよ。余計に気が滅入る」

「元氣出して。あなたがそう言うと思つて、既に準備を整えておいたわ」

「なんだ？ 修行する娼館で治療してもらったことか？ それはさつき聞いたぞ」

「違う違う」

淫魔は短い呪文を唱える。

その効果なのだろう。聖騎士の全身を覆う包帯が、一瞬で消えた。

「あなたが負けてから、今しがた目覚めるまでの一週間。ずっと巻いていた魔法の包帯は、怪我の治療効果だけじゃなく、肉体を作り替えて性転換させる作用もあったの」

「なにッ！ それじゃまさか……」

「ええ。身体が全快した今、性転換も完了してらつてわけ」

部屋の隅に置かれていた車輪付きの姿見を引つ張ってくる。

「これが……おれ……？」

鏡面に映る自分に絶句するセシル。

ベッドで身体を起こしているのは、目つきの悪い男でなく、掛け値なしの美人。見た目は少し若くなっており、二十歳前の乙女のそれだった。

「変わりすぎだろ……」

全身を見てみたくてベッドから降りる。

戦いに敗れて致命傷を負っていたが、本当に完治しているらしい。

肉体には傷もダメージもまっただくなかった。

「あれ……アイリーンお前、背え伸びた？」

「そっちが縮んだのよ」

隣に来た淫魔がこともなげに言う。

男のときは喉の辺りまでの背丈だった彼女だが、今では少し上背があった。

「カラダが女に作り替えられた影響」

「うーむ……しかも、身体が弱くなってる気がする。これまでよりも背の低い女になったせいで、筋肉が減ってるのかもしれない」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>